

---

## 被災地における“祈りの場”の誕生

—宮城県名取市閑上地区の日和山—

---

鈴木 岩弓<sup>1</sup>

東日本大震災の被災地では、自然発生的あるいは組織的・計画的に、さまざまな“祈りの場”が作られている。本稿では、宮城県名取市閑上の日和山に注目し、そこが生者と死者を繋ぐ“祈りの場”に展開してきた過程を探る。

---

<sup>1</sup> すずきいわゆみ：東北大学大学院文学研究科 教授

## 1. はじめに

平成23年3月11日、午後2時46分に勃発した東日本大震災は、近年の日本では稀にみる大きな災害となった。警察庁緊急災害警備本部の平成27年1月9日調べによると、この震災による死者は日本全国で15,889人、行方不明者は2,594人に達している。特に死者が多かったのは震源となった三陸沖に近い岩手・宮城・福島の三県で、これら三県の死者の合計は15,882人、今回の震災死者全体の99.6%を占めている。

こうした死者の多くは、入院して徐々に衰える「衰弱死」ではなく、字義通り全く突然に死を迎えた「突然死」であった。そのため多くの死者自身、自己の死を覚悟する間もなく亡くなっていったのであろう。また16,000人近くの死者の背後には、その人を取り巻く家族や親族、知人がその何倍、何十倍もの数残されることとなり、そうした生者にとっては気持ちの整理もできない中で受け入れざるを得ない「死」であった。特に残された生者の中には、自分が何かすれば「死」を回避できたのではなかったか、などといった思いをもつ人も多く、結果として、残された生者の間にはさまざまな“負い目”が生じることになった。かかる問題は、生死が不明なまま行方不明になっている家族・親族がある場合にはさらに複雑で、3.11以降の時間が止まったままの人々が今なおいる。

現在の被災地では、突然の別れにより切断された<生者と生者の繋がり>が、時間と共に次第に<生者と死者の繋がり>へと姿を変え、祈りを通じた繋がりの確認が、さまざまな時、さまざまな場でなされている。“祈りの時”としては、命日と思しき3月11日や月命日、盆や彼岸などのような特別な日が意味をもつことはもちろんであるが、そうした時ならずとも、その都度的に行われることは珍しくない。それに対し“祈りの場”は、“時”と比べてより限定的に選択され、“意味ある場所”でない<生者と死者の繋がり>の成立が難しいものと考えられているようである。以前被災地で、老婆が「津波で流されて何も残っていないので、死者との間を繋ぐ何かをしたいと思うようになってきた。自分はそれが慰霊碑だと思う。だから何とか頑張って、この地に慰霊碑を作りたい」

と言っていたのを思い出す。死亡場所・遺体発見現場・生前の生活の中心地などと共に、直接そうした場所ではなくても、慰霊碑や供養塔などが作られたことで、その場所が＜生者と死者の繋がり＞に重要な意味を付加させている例も見られる。

現在、被災地には自然発生的に、あるいは組織的・計画的に、震災死者に対する多くの“祈りの場”が誕生している<sup>(1)</sup>。本稿ではその例として、震災直後より自然発生的に“祈りの場”となってきた宮城県名取市閑上（ゆりあげ）にある日和山を取り上げ、その地が生者と死者を繋ぐ“祈りの場”として展開してきた過程を見ていくことにしたい。

## 2. 名取市閑上地区

本稿で注目する日和山は、仙台市の南に接する名取市北東部の閑上地区に位置する小山である。仙台平野の最東端にある閑上地区は、近世期には閑上浜と称していた。地区の北側を東に流れる名取川河口の港として、漁業はもちろん仙台藩の水陸輸送にとっても重要な拠点港であったという。

地名に用いられている「閑」の字は国訓で「ゆり」と読み、地区名は「ゆりあげ」となる。この文字を使用した契機は、元禄10年（1697）に、四代目藩主の伊達綱村が、伊達家の墓所となった大年寺を開山の折りに参詣した際の逸話による。山門から南東方向に望める浜が「ゆりあげはま」と呼ばれることを知った綱村が、さらにその漢字表記を尋ねたところ特に無いといわれたために、門の内から水が見えたという自分の経験から「閑」の字を用いるように指示したことに因むと言われる<sup>(2)</sup>。

とはいえ今の話からは、漢字表記が落ち着く以前から、この地は「ゆりあげ」と呼ばれていたわけであるが、なぜ「ゆりあげ」となったかの理由についても諸説聞かれる。ただ、それらの多くは、この浜にご神体（仏像）が波にゆりあげられて発見されたという、いわゆる漂着神の故事に因む共通したモチーフで構成されている<sup>(3)</sup>。

震災前の閑上地区は、閑上港がある海から内陸部に向け、閑上町区・小塚原・牛野・高柳・大曲の五区に細分されていた。閑上港への津波到達時刻は、本震発生後一時間余り後の15時52分頃のことだが、第一波の津波で潮位計が破壊されて観測不能となり、津波規模の詳細は不明である<sup>(4)</sup>。ただ名取市内の最大浸水高は閑上港付近の建造物に残された痕跡から、参考値として9.09mであったとされる。また津波の最大浸水距離は、地上で約5.5km、河川では名取川が約8km、増田川が約7.4kmであった。

東日本大震災にかかわる人的被害は、2014年3月31日現在、名取市全体で884人（遺体確認分のみ）であったが、閑上地区では753人にのぼり、名取市全体の死者の85.2%を占めていた。海岸線から1km以内の木造住宅がほぼ全戸流出した状況から考えると、名取市の中でも海に面した閑上地区の被害が大きいことは頷けるが、これをさらに閑上地区の中で見ていくと、東を海、北を名取川に挟まれた閑上町区の被害が最も大きく、709人の死者は名取市内の全死者の80.2%にのぼっていた。この数字を震災以前の人口に占める死者数の割合としてみると、名取市民全体に占める震災死者の割合が1.2%であるのに対して、閑上町区住民の震災死者の割合は12.5%と実に10倍にのぼっており、この地区の人的被害がことさらに高かったことが明らかになる。

### 3. 震災前の日和山

日和山は、閑上港の海岸から800mほど内陸に入ったところに立つ、標高6.3mの小山である。今回の震災時の津波はこの山をすっかり呑みこみ、現在も山上に生き残っている松の枝に引っかかった瓦礫が、頂上の地表から2.1m上に痕跡を残していたことから、少なくとも8.4mもの津波がここを襲ったといわれる。名称が示すように、この山は漁をする際の「日和見」の山であったことから、6m余りであっても、この地が周辺よりことさら高かったわけで、海岸線近くの平坦地であった閑上町区

は、津波襲来後、かつて集落を形成していた家々の土台だけが広がる荒地となっている。

前章で閑上の歴史を述べるのに参照した『閑上風土記』に所収の『東多賀村郷土誌』には、閑上には、現在ある日和山とは別の日和山があったことが指摘されている。

### 日和山（法華山）

閑上より東一町ほどの所にあり、船の出入・気象・海上の状態等を見た所である。今の救難所の南にあたり、橋浦弁蔵氏邸の東北にあった。別名法華山ともいう。山上に碑があったが、後春日氏の堂の境内に移された。（郷土誌）

堂は法華道場でのち水害により碑もろとも流された。日和山は単なる小高い丘であったらしいが、閑上八景のうちに「日和山帰帆」「法華山秋月」があった。当時の日和山の面影はいまはない。

（『閑上風土記』230-231頁）

この記述にある旧日和山の位置は、現在、把握できていない。とはいえ「当時の日和山の面影はいまはない」とするこの文章の次に現在の日和山に関する記述があることから、旧日和山は今の日和山とは別の「救難所の南」にあったとされる。『閑上風土記』に掲載の写真によると、「救難所」は河口海岸の岸辺にあり、旧日和山は文字通り日和見のため、現在よりかなり海寄りに立っていたと思われる<sup>(5)</sup>。また法華山という別称からも、この山には法華系宗教者の介在が推測され、嘉永6年（1853）の大旱魃に際しては、法華山に近在の農民が群集し、毎日塩垢離をとるなどして雨乞いをしたという記述も残っている<sup>(6)</sup>。

これに対して現在の日和山は、以下の記述から自然地形としての山ではなくて、人の手で作られた人工的な山であることが明らかにされる。

### 築山

大正九年在郷軍人分会の発起で、当時の村民全体で築いた山であ

る。当時第二師団長であった中嶋中将も、村民とともに土砂を背負われ、新丁が中島町と呼ばれる由来となった。築山落成と共に、かつて宮下橋の下にありその後湊神社に移転されてあった「富主姫弁財天」が安置された。山上にある「山神」の碑は、もとの日和山山頂にあったものが移転されたのである。（『閑上風土記』231頁）

最後の「山神」の碑の記述に「もとの日和山山頂にあったものが移転」と書かれていることから、日和山に新旧二種あったことは当時の了解事項であったのであろう。おそらく、日和見のために使っていた旧日和山が洪水などで流されて使えなくなったために、在郷軍人分会が中心となって新造したものと考えられよう<sup>(7)</sup>。

新たな日和山を「村民全体で築いた」時の具体像は、以下にある。

築山工事は、橋浦茂三郎氏が総監督で、現場監督は曾我正治氏が当たった。各区に人夫を割当て、茅地のうわ土を掘りとり、もつこと、紐を引くと底が開くようになっているヤンダ箱といわれる箱を背負った。やんだやんだ（嫌だ嫌だ）と運んだのでヤンダ箱になったというが、真偽のほどはわからない。昼食にパンが配られたので、茂三郎氏のことがいつからかモサパンとなり、落成祝いの仮装行列にみかん箱の下駄をはいて、のんきな父さんを演じた小齋不可蔵氏はノンキと呼ばれるようになった。勤労奉仕のほか日当六十銭の人夫も使ったので、若い婦女子のいい収入にもなったという。

（『閑上風土記』231頁）

かかる経緯で築山された日和山は、閑上の人々にとっては自分たちの先祖が作った思い入れのある空間だったのであろう。『閑上風土記』には築後間もない大正10年の日和山の写真が掲載されているが<sup>(8)</sup>、山腹には木が生えておらず、震災後の日和山の姿とよく似ている。とはいえ山の中腹にははっきりとした段差があって、台座の上に山を重ねているように見える。また麓から山頂まで真っ直ぐに伸びる階段の途中、丁度山腹

の段差の上に鳥居があり、山上に登った正面には、「忠魂」と大きく書かれた石碑が建っている。先の引用文中には「山神」の碑とあるが、写真に見える頂上部分には他の石碑は確認できない<sup>9)</sup>。

山上の正面左奥には、富主姫神社の社殿の屋根が見えている。この神社は、先に見た『閑上風土記』によれば、以前は「富主姫弁財天」と呼ばれていた。この神社が弁財天と関連する点は、以下のように伝えられている。かつて閑上上町の伊藤秀吉家の先祖が、房総沖で遭難しそうになった際に、竹生島弁財天に祈願して難を逃れたことから、琵琶湖の竹生島弁財天を勧請して伊藤家の氏神にしていた。ところが、この弁財天の祭日に出漁した漁船が海難事故にあったことから浜中の信仰が集まるようになり、伊藤家から富主島に遷座されて地区全体で祀るようになった。それが明治41年、貞山堀開堀のために閑上浜村の村社である閑上湊神社境内に移されたが、大正9年の日和山築山を契機に、この山上に遷座されることとなった。日和山に関する土地登記簿を確認すると、この土地は明治38年9月に官林であったものが東多賀村に払い下げられて以降、現在では名取市の土地となっている。つまり富主姫神社は村所有の土地において、村社の境内社としてではなく、地区民の信仰対象の独自の場で祀られていたのである。閑上の氏神は湊神社であるが、『むかしの写真集 閑上』（改訂版）には、昭和13年撮影の「日中戦争一周年記念に郷土出征兵士の武運長久を祈願」と題する日和山の忠魂碑前での集合写真が掲載されている。氏神の湊神社が近くにありながら、富主姫神社で出征兵士の武運長久が祈られた理由は不明であるが、戦前からこの地が、地区の人々に関わる祈願の場であったことがわかる。

#### 4. 震災後の日和山

震災時、津波は地区内で最も高い日和山をも呑みこんで押し寄せてきた。そのため、水が引いた後の日和山は、その姿を大きく変えていた。山上にあった富主姫神社の社殿と忠魂碑は勿論、参道の階段の両脇にあ

った手すりや鳥居もすべて流され、山の斜面に生えていた木々もほぼ根こそぎ失われて、日和山は築山当時のようなはげ山となってしまったのである。しかしながら、多くの木造家屋が土台を残してほぼ流出してしまった閑上町区にとっては、変貌したとはいえ、遠くからもそれとわかる形で立つ日和山は地域のシンボルでもあり、そこから震災後の地区の様子を鳥瞰できる“意味ある場”となったのである。

以下、震災後の日和山及びその周辺に対する人々の関わりの変化について見ていくことにしたい。とはいえ震災後間もなく被災地への立ち入りが制限されたため、関係者以外が日和山に近づけるようになるにはしばらくかかった<sup>(10)</sup>。そうした2011年3月中旬の震災直後の状況も含めて、日和山でなされた人々の関わりを継続的に知る手掛かりとして、本稿では以下の資料を使用して2014年12月末までの流れを見ていきたい。

#### ①閑上の地元、名取市などの資料

- ・『閑上復興だより～もう一度心をひとつに～』第1号（2011年10月12日発行）～第31号（2014年12月20日発行）  
閑上の住民有志が中心となり、震災の年の10月以降、毎月一回刊行している無料配付のミニコミ誌。
- ・名取市総務部震災記録室編『東日本大震災 名取市の記録』名取市、2014年10月
- ・名取市役所総務部震災記録室編『名取市 東日本大震災 一年間の写真記録』名取市、2013年3月1日
- ・名取市総務部総務課編『広報なとり』災害臨時号（2011年4月）～No.992（2014年11月）

#### ②新聞

- ・『河北新報』  
仙台市に本社のある、東北地方のブロック紙。
- ・『朝日新聞』
- ・その他の全国紙・地方紙  
震災直後からは全国から新聞記者が被災地を訪れており、被災地の

人々の目に触れることの少ない遠隔地の地方紙に、日和山のことが書かれている場合もある。

### ③その他

山上の卒塔婆、インターネットで「閑上日和山」と引いた際に出てきた情報など。インターネット資料では、特に撮影期日が明白な写真が山上の変化を知る上で有効な資料となった。

これら三種の資料から把握できるところをまとめたものが、以下の<表1>である。この表では、それぞれの情報の中から、年月日・誰が・どこで・何をしたか、そしてその際なされた日和山に対する意味づけ、日和山に関する写真の有無について、使われている表現を書き抜き、最後に典拠を挙げる形で作成した。

<表1>に出てくる日和山に関する情報総数は98件であるが、それらの数の変化を見ると、震災のあった2011年が41件で最多で、以後24件、19件、14件と減少している。ここでその理由を断ずることは一概にできないが、おそらく、時間経過と共に震災後の非日常的生活が日常化し、記録する価値が希薄化しているといった側面は指摘できよう。ここではまず、日和山が“祈りの場”となってきた経過を見ることから始めよう。

「どうした」の記述で最古のものは、震災後間もない3月13日にここを訪問した『河北新報』記者のコラムである。ただこの時は写真もなく、搜索活動や瓦礫撤去作業を伝えるものであった。この時期、日和山周辺への一般人の立ち入りは制限されていたが、18日の『河北新報』では、五人の家族連れがこの山上で手を合わせている写真が紹介されている。この家族がなぜここで手を合わせるかの説明はないが、この時の山上は民家の屋根などの瓦礫が山積みで、この家族は山上から壊滅した地区を望んで手を合わせていた。

<表1>の資料で、山上に“祈りの場”が確認されるようになるのは4月4日のことで、山上に見られたモニュメントを、『毎日新聞』は「慰霊碑が建立され」と評して記事にした。このモニュメントは手製のもので、イメージとしては「ニューヨーク〇km」「北京〇km」のように世界

表 1 関上日和山の出来事

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
20110313		日和山		(「河北新報震災アーカイブ」の写真：山上から周辺を鳥瞰した写真)	130822『河北新報』	○
20110313	記者	日和山	今は辺りで最も高い場所	更地のようになった陸地で、生存者の捜索や瓦礫の撤去作業が本格化した	110314『河北新報』	×
20110318	五人の家族づれ	日和山	被災地を望む高台	震災から一週間。追悼のサイレンが鳴り響く中、大津波が襲った名取市関上では一家5人が被災地を望む高台に登り、犠牲者を悼んで手を合わせた。	110319『河北新報』	○
20110404		日和山		慰霊碑が建立され、多くの人たちが津波の犠牲者たちに手を合わせている「何もしてあげられなくてごめんね」「一人じゃないよ」「みんながいるよ」	110404『毎日新聞』	○
20110405		日和山		(「河北新報震災アーカイブ」の写真：「立ち上がれ東北 負けるな日本」の立て札)	130711『河北新報』	○
20110408	住民	日和山	集落一面を見渡せる	手作りの慰霊碑に手を合わせていた／「安らかに眠りください」「何もしてあげられなくてごめんね」白いペンキで塗られた木の慰霊碑には、多くのメッセー	110409『新潟日報』	×

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
				ジが書き込まれていた。		
20110411	70代女性	日和山	高さ10メートルにも満たない人工の山／町を見下ろし	供えられた花や果物に手を合わす／津波で流れ着いた民家の屋根やソファ、風呂桶など散乱	110411『河北新報』夕	×
	名取市ほか	日和山	サブ会場	追悼セレモニー	名取市の記録p. 92	×
	救助隊員ら	日和山		宮城県名取市閑上地区の丘の上では地震発生時間の午後2時40過ぎ、救助隊員らが手を合わせ、犠牲者の冥福を祈った。	110411『讀賣新聞』	○
	救助隊員ら	日和山		震災から一ヶ月目／慰霊のため黙祷	名取市の記録 p.274、5	○
	自衛隊員や消防隊員ら	日和山		輪になって手をつなぎ、黙とうを捧げる	110412『朝日新聞』	○
20110421	閑上小／中の児童生徒	日和山		日和山山上に「閑上ひまわり」の種をまく	『閑上の全記録』p. 78	○
20110428	地区住民ら約300人	日和山	津波犠牲者を慰霊する地	四十九日の法要営まれる／静かに手を合わせ、犠牲者の死を悼んだ	110429『河北新報』	○
2011	枝野官房長官	日和山		(視察)	『名取市東日本大震災一年間の写真記録』p. 100	○
20110508	日フィルバイオリン奏者ら	日和山	壊滅した街に残る	「鎮魂と連帯の響き」／アベマリアなど演奏	110509『朝日新聞』	○
	バイオリンを奏する松本克巳さん	日和山	閑上地区を見渡す	「愛とヒューマンのコンサート」／犠牲者に鎮魂の祈りをさ	110509『毎日新聞』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
				さげた		
	被災地での演奏活動を続ける市民団体	日和山	被災地を見下ろせる場所	コンサート「鎮魂と連帯の」響き／（被災者は）亡き友をしのんだ	110509『河北新報』	○
20110511	ハマボウフウの会会長	日和山	津波の犠牲者を慰霊する鎮魂の地となっている	「再起へ 被災地だより」	110522『河北新報』	○
20110609	宮司、関係者	日和山	犠牲者を慰霊するシンボル	流出した湊神社が日和山の富主姫神社に分霊されて復活／犠牲者の霊に黙祷を捧げた後に神事	110610『河北新報』	○
	湊神社宮司ら	日和山	住民の想いが詰まった	神籬／何もかも失った閑上が復興する第一歩にしたい	110610『朝日新聞』	○
20110611	自宅を流された近くの会社員	日和山		花や線香を手向ける／亡くなった近所の住民らを悼んだ／犠牲者の冥福を、祈り手を合わせる	110611『河北新報』夕	○
20110618	歌手の加藤登紀子	日和山		地区の住民を勇気づけようとコンサート／住民が返礼として閑上大漁唄を披露	110619『河北新報』	○
	歌手の加藤登紀子	日和山		ライブ開催／元漁師が歌ってくれた「閑上大漁節」が耳から離れない／力が宿っている	130725『河北新報』	×
20110715	国際バレーボール連盟会長	日和山		慰霊碑に献花	日本バレーボール協会 News	○
20110728	スーダンの子ども20人	日和山	閑上の鎮魂の丘	体験談を聞く	110728『河北新報』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
20110811	おばを亡くした父子	日和山		花を手向け、祈る／手を合わせる 前向くために	110812『朝日新聞』	○
20110816	塔婆に手を合わせる女性	日和山		新盆を迎え花を手向ける人や手を合わせる人が増えた	110816『産経新聞』	○
20110825	タイのタクシン元首相	日和山		(視察)	『名取市の記録』 p. 286	○
20110907	経王山立正院矢吹上人	日和山		大震災供養と祈願のために卒塔婆建立	卒塔婆裏	—
20110910	神籬に手を合わせる女性	日和山		閑上湊神社と富主姫神社に手を合わせる人が止まない	110910『産経新聞』	○
20110911	幼なじみが集まって	日和山	小さいころから思い入れがある場所	祈りに来た／区切りに	110913『朝日新聞』宮城全県	○
20110922	川端達夫総務大臣	日和山		(視察)	『名取市の記録』 p. 289	○
20111011	女性と幼児	日和山		卒塔婆の近くで佇む	111011『産経新聞』	○
20111016	閑上太鼓保存会メンバー	日和山	地区民の復興と追悼の象徴	閑上湊神社の例祭・復興祈願祭 閑上太鼓奉納	111017『讀賣新聞』	○
	神楽奉納／見物人	日和山		閑上湊神社の秋祭り（日和山山上で神楽奉納）	111017『産経新聞』	○
20111017	サッカーもとブラジル代表ペレ	日和山		花束を捧げ犠牲者の冥福を祈った	111018『河北新報』	×
20111126	還暦過ぎた閑上小・中卒業生	日和山	被災地を見下ろす鎮魂の丘	追悼祭に先立ち12人の同級生の犠牲者を追悼し慰霊塔に献花	111127『河北新報』	○
	還暦の閑上小、中卒業生	日和山		還暦を迎えた50人が、同級生12人の津波犠牲者を追悼し、	111211『河北新報』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
				慰霊塔に線香と花を 供え、海に向かって 手を合わせた		
20111129	セルビア共和国議長	日和山		神籬に献花	120101『広報なとり』 No. 958	○
20111209	奈良の女性住職	日和山の前	壊滅した閑上の鎮魂のシンボル	被災女性の詩に曲を付け、完成した曲をこの日日和山の前でお披露目	111226『河北新報』	○
20111210	国際サッカー連盟会長	日和山		黙祷	111211『河北新報』	×
20120101	200人以上の人	日和山	津波にも残った	初日の出に祈り／閑上湊神社が元旦祭	120101『毎日新聞』	○
	200人	日和山	津波で壊滅的な被害	初日の出に再生の願いを託した	120103『河北新報』	○
20120109	津波で親族亡くした家族連れ	日和山		(寒さの中で山上の塔婆に祈る)	12009『産経新聞』	○
20120129	サッカーJ1仙台	日和山	地域を見渡す	選手スタッフ39人慰霊碑に献花し祈り	121『河北新報』	○
20120308	タイのインラック首相	日和山			『名取市東日本大震災一年間の写真記録』 p.100	○
20120309	宮城県宗教学会 法人連絡協議会	日和山		同会主催慰霊祭 冥福を祈って祭壇に献花し、14:46に黙祷	120310『河北新報』	○
20120311	なとり観光復興プロジェクト実行委員会	日和山周辺		3.11ゆりあげの集いー追悼と復興への1歩を踏みだすためにー	120301『広報なとり』 No. 960	○
20120311	立正佼成会 仙台教会	日和山		屋根付き塔婆の建立	卒塔婆裏	ー
20120312	法華宗東北教区・被災地法要参加	日和山		東日本大震災・第一周忌法要／追善供養の法要	卒塔婆裏	ー

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
	者					
20120326	カナダハーバー首相	日和山		祭壇に献花、黙祷	120327『河北新報』	○
	カナダハーバー首相	日和山		祭壇に献花	『名取市の記録』 p. 287	○
20120514	カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州首相	日和山		祭壇に献花	『名取市の記録』 p. 288	○
20120526	NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台	日和山	沿岸部の象徴的な被災場所	「定点観測アーカイブ」プロジェクトで日和山周辺を定点観測 一般公開サロン開催	120525『河北新報』	×
20120605	アルメニア共和国大統領	日和山		祭壇に献花	『名取市の記録』 p. 288	○
20120630	「向日葵プロジェクト」参加者	日和山周辺		日和山周辺にひまわりの苗植樹	名取市の記録 p. 281	×
20120702	佐々木一十郎市長候補	日和山	津波で被災	山上の神社で必勝祈願	120702『河北新報』	×
20120724	震災巡礼東北の道を考える会	日和山	津波記憶の継承場所	震災500日目のこの日被災地から選んだ巡礼ポイントを発表	120612『河北新報』	×
20120811	造形作家の新宮晋	日和山		地元の人などが書いた絵や文字の風車200本で、山の斜面に「元気」の文字／鎮魂と復興への祈り	120816『河北新報』	○
20120813	地元住民や観光客	日和山	復興と追悼のシンボル	連日多くの地元住民や観光客が訪れる	120815『讀賣新聞』	○
20121021	地区小中学生若者	日和山		閑上湊神社秋の例祭で神輿渡御二年ぶりに復活／閑上復興祈願祭では閑上太鼓	121022『河北新報』	○
201210??	菓子店店主	日和山	閑上地区を	商工会の臨時職員と	121106『河	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
	語り部として		見下ろす	して被災現場の案内	北新報』	
20121102	ウイーン・フィル楽団員4人	日和山	震災犠牲者慰霊碑がある	慰霊碑に献花し黙禱／合奏	121102『日本経済新聞』	○
	ウイーン・フィル	日和山		慰霊と復興への願いを込めた、クラシックの献奏	121211『河北新報』	×
20121207	ハイチ共和国大統領	日和山			『名取市の記録』 p. 288	○
20130303	宗教者・宗教学者	日和山		パネルディスカッション「東日本大震災と宗教者・宗教学者」の翌日、祈りを捧げた	130323『河北新報』	○
20130310	箱塚屋敷仮設住宅住民	日和山		震災犠牲者の三回忌追悼行事として午後四時より護摩焚き／犠牲者への追悼の言葉と和紙に	130218『河北新報』	×
	名取市観光物産協会	日和山から閑上中学		日和山から閑上中学校まで約1.2キロに光の道を作る追悼イベント 絵灯籠5500基で「光の道」を作り、犠牲者の霊を安全な場所へと導く	130311『河北新報』	○
	名取市観光物産協会	日和山まで		「3.11閑上追悼イベント2013－閑上中学校から日和山まで1.2キロに光の道を作ります－」追悼のためのイベント	130301『広報なとり』 No. 972	×
20130311	住民やボランティア	日和山		発生時刻に海に向かい手を合わせ慰霊碑に献花	130312『河北新報』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
20130317	被災した宮大工	日和山	「海の神」をまつる祈りの場	富主姫神社の社殿再建	130318『河北新報』	○
20130425	白老中学校修学旅行生	日和山など		案内人の話を聞きながら体験型ワークショップ	130428『河北新報』	×
20130505	神社・地域の関係者	日和山		山上の富主姫神社の遷座奉祝祭：湊神社仮殿・震災犠牲者を弔う鎮魂社も合祀	130506『河北新報』	○
	津波で亡くなった千葉規宮司	日和山	閑上地区を一望できる	富主姫神社の社殿が再建され、湊神社も遷座／復興祈願と鎮魂の想いが込められた二つの神社	130512『河北新報』	○
20130629	NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台	日和山ほか		「もういちど見てみよう3.11ツアー」で今春来仙の留学生に見てもらい、国に伝えてもらう	130612『河北新報』夕	×
20130810	住民支援者	日和山ふもと		「8.11閑上追悼イベント2013」七夕飾りを自由に作る、翌日閑上中学校に	130808『河北新報』	○
	住民	日和山		日和山に七夕飾り飾られる	130901『広報なとり』No. 977	○
	仙台のユニットハウス製造会社が支援	日和山ふもと		仮設授与所がオープンし、閑上湊神社と富主姫神社のお守りなどの販売	130821『河北新報』	○
20130910	閑上小卒の喜寿同期会	日和山	壊滅した閑上地区を一望できる	祭壇を仮設／津波で亡くなった同級生・恩師の追悼のため、一人一人が焼香して故人の冥福を祈った	130911『河北新報』	○
20130911	遺族やボランティア	日和山		30回目の月命日に黙祷	130912『河北新報』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
20130915	関上小中学校 校卒S32、 33生まれ	日和山		同級会／日和山集合 ／6人の犠牲者に献 花・黙祷	130929『河 北新報』	×
20130919		日和山	甚大な津波 被害を受け た	中秋の満月が社殿を 明るく照らした	130920『河 北新報』	○
20130922	ヨルダン共 和国上院議 長	日和山			『名取市の 記録』 p. 288	○
20131020	関上地区の 住民ら	日和山		関上湊神社秋の例祭 で神輿渡御など	131021『河 北新報』	○
20140309		日和山 から内 陸		追悼イベントで絵灯 籠を並べる	140310『河 北新報』	○
20140311	遺族	日和山	地区を一望	供養塔の周囲をほう きで掃き清めた／鎮 魂の祈り	140311『河 北新報』夕	×
	母を亡くし た会社員	日和山	眼下には何 もなく荒涼 とした光景 が広がる	慰霊碑に手を合わせ る	140311『神 戸新聞』	○
20140316	生命保険フ ァイナンシ ャルアドバ イザー協会	日和山 隣接地		トレーラーハウスを 設置し、名取復興支 援協会に寄贈交流ス ペース	140317『河 北新報』	○
20140322	尚綱学院生 ら	日和山 など		「きずなトリップ 2014」の見学	140323『河 北新報』	○
20140608	スマイルと うほくプロ ジェクト	日和山 駐車場		花壇整備	140610『河 北新報』	○
20140811	仙台高専の 学生／名取 市	日和山 向かい		慰霊碑除幕式。将来 は関上地区内に震災 メモリアル公園を整 備し慰霊碑も移転	140804『河 北新報』	○
	遺族・市民	旧日和 山公園		慰霊碑除幕式後、遺 族や市民が献花／こ こへ祖父母に会いに 来たい／安らぎの場	140811『朝 日新聞』	○

年月日	誰が	どこで	日和山とは	どうした	典拠	写真
				所になれば		
	住民ら350人	日和山近く	震災後多くの住民らが手を合わせてきた	鎮魂と復興を祈る新たな象徴／人々の祈りの聖地のような場所	140812『産経新聞』	○
	遺族や市関係者ら計約400人	日和山近くの市有地		震災慰霊碑除幕式。亡き人を悼み／故郷を想う／故郷を愛する御霊よ／安らかに944人の犠牲者名を帰した芳名板／犠牲になった御霊に慎んで哀悼の誠をささげる	140812『河北新報』	○
20141003	安川電機会長以下グループ代表	日和山		慰霊碑前では献花黙祷して犠牲者の冥福を祈る	復興だより31	○
20141019	大分の本宮大工	日和山		湊神社の秋の例祭／獅子頭一對を寄贈	141015『河北新報』	○
	閑上の住民や子供ら	日和山		閑上湊神社仮社殿前で閑上湊神社秋の例祭／閑上復興祈願祭	復興だより31	○
20141122		日和山参道脇		長崎女子高校の生徒の送ってきた紫陽花の苗を「閑上震災を伝える会」メンバーが植樹	復興だより31	○

の大都市までの距離が書かれた板が方角に合わせて一本の柱に打ち付けられた標識のような感じで、白ペンキ塗りの木に「合掌しましょう」「ありがとう」「やれば出来るよ」、そして六地藏のマンガ風な絵が、黒字のみならず赤字も交えて書かれていた。またその近くには木製の奉納札を、これまたペンキで白く塗って足を付け、「祈 やすらかにお眠りください!!!」（「祈」と「!!!」は赤、それ以外は黒字）と書いて立てていたことは、地元の方がインターネットに上げている「名取市閑上復興支援

のブログ」からも確認できる。こうしたモニュメントの前には盆が置かれ、線香が用意され、花や供物を置くことができるようになっている。こうしたアイテムが並べられている対象こそが、後述する神籬も含め、記者にとっての「慰霊碑」なのであろう。このモニュメントがどのような経緯で作られたかは不明なままであるが、翌5日にここを訪れた『新潟日報』の記者も、これを「手作りの慰霊碑」と呼び、参集した人々がここに手を合わす姿を記事にしている。おそらく、震災直後の日和山は<生者と死者の繋がり>が何もなく、ただ、頂上から望める被災地区に向かって手を合わすといった行為しかできなかった。しかし4月初めには、日和山に<生者と死者の繋がり>として、仏教色はありながらも独創的な手作りのモニュメント（「慰霊碑」）が設置され、またそれとは別に、それぞれの想いから塔婆や木札が立てられていった。山上のこうした場所には、後から参集した人々が自然発生的に花や供物を捧げ、そこが山頂内の小さな“祈りの場”として定着し、そこに祈りを捧げる姿が再生産されるようになったのである。何の組織性もない日和山に参集する人々もつ、死者に対して何かしたい、関わりたいというニーズが、他の人々の行動などを参考に定型化され、こうした“祈りの場”が誕生したものと言えよう。

震災の日を命日とするなら、四十九日は4月28日であった。この日、地区住民らが300人集まって、日和山で四十九日の法要が執り行われた。歴史的経緯として日和山は、閑上地区が管理する名取市の土地であるため、富主姫神社が鎮座してはいても、この地は宗教的に中立と考えられてきた。その意味で、寺院共々地区が壊滅した閑上の震災犠牲者のために、日和山で四十九日の法事を行うことに対して違和感はなかったのである。

そうした中、6月9日になると、社殿が流されたことで何も無くなってしまった富主姫神社の神籬が日和山山上に立てられた。この時には併せて、津波で全てを流されてしまった閑上地区の氏神である湊神社を、富主姫神社に分霊することで復活させ、湊神社の神籬もこの地に並べて立てられることとなった。富主姫神社は前述のように、一時湊神社に遷

座していた経緯をもつ。その意味から、以前とは逆に、今回の震災を受けて壊滅した湊神社を、富主姫神社が支えることになったものと言えよう。神籬というシンボルが出来たことで、10月下旬には閑上地区の氏神である湊神社の例祭が日和山において行われた。また以後、元旦祭と併せて、日和山が湊神社の祭典を挙げる“場”となることも毎年定着することになった。

それがさらに一歩進み、地元の宮大工らの協力で社殿が再建されたのは2013年5月5日のことであった。富主姫神社の遷座奉祝祭が催されたこの日、新造の社殿には湊神社の仮殿と震災犠牲者を弔う鎮魂社も合祀されたことから、日和山の地は閑上地区における神社神道のセンターとしての様相を整えたのである。同年8月10日には、日和山の麓に仮設の社務所も設置され、日和山は以前にも増して、参集する人々が神社と関わりをもつ際の接点としての意味付けが強くなった。なお新しく作られた社殿前の説明書には「このお社は、平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災の犠牲者への鎮魂の思いから」建立されたことが記されており、この機会に新しく祀られるようになった鎮魂社には「内部には犠牲者のお名前を記し、祀っております」とある。

こうして富主姫神社、湊神社の整備が行われる中、氏子達の間で山上の整備も行われ、その一環から、初期の段階に「慰霊碑」となっていた白ペンキ塗りのモニュメントは、撤去されることとなった。ただこれは神道の神籬が立つ土地であるから、仏教色を排除しようといった意識からなされたことではなく、白ペンキ塗りのモニュメントは、その派手さから当初より場にそぐわないという評判があり、この機会に撤去されることとなったのである。日和山はあくまで神社の土地ではなく地域の土地であったため、最初期の仏教的な「慰霊碑」が無くなっても、9月7日には法華宗が角塔婆を立て、また一周忌に相当する2012年3月11日には立正佼成会仙台教会が屋根付塔婆を建立した。しかしこれらに対する批判的意見はなく、それらが仏教系と意識されているか否かは不明であるが、山上における“祈りの場”の一つとして定着している。

こうした展開を見てくると、現在の日和山ではたまたま、神道、仏教、

新宗教それぞれの教えに則った形の“祈りの場”が設置されていることになる。またそこへと参集する人々は、それら“祈りの場”に、それぞれの宗教教義に則ったやり方で、あるいはそれを無視して自分独自のやり方だと、多様な形で関わりをもっている。このようなルーズな括りの中ではあるが、現在の日和山は、参集してくる人々の＜生者と死者の繋がり＞確認のニーズに応える“祈りの場”となっているのである。

表2 日和山に対する意味づけ

年	総数	標高が高い 眺望がよい	死者を悼む場	思い入れがある	事実
2011	41	7	7	2	2
2012	24	3	2	0	3
2013	19	2	1	0	2
2014	14	2	1	0	0
計	98	14	11	2	7

収集した記事や記録の中には、「日和山とはいかなる場所か」といった意味づけを簡潔な記述で行っていることがある。それをまとめたのが＜表2＞である。これをマクロに見ることで、日和山に対する意味づけの変化を見てみよう。まず、この土地に対しては「標高が高い」それ故に「眺望がよい」といった自然環境の特徴を紹介する記述が最多で、こうした意味づけはとりわけ震災直後の3月から5月初めまでに6件あり、以後次第に減少する。かかる評価は、津波を受けて様変わりしてしまった日和山ではあるが、それ以上に変わってしまった閑上地区全体を見渡せる唯一の場として、特別な意味が付与されていたためと考えられる。壊滅した閑上にとって、とりわけ震災から立ち直ろうという最初期における日和山は、死者を悼む場所である以前に、ともかくも自分たちの暮らしていた閑上の現状把握のためにのぼる場所であったということであろう。

＜表2＞にある「死者を悼む場」とまとめた意味づけは、＜表1＞の

「日和山とは」の最初期には見られず、2011年の4月28日に登場し、この頃以降「標高」「眺望」が少なくなるのと反対に増加してくる。とはいえ、ここが「死者を悼む」場所であるという認識は震災の年の内に社会に定着してきたのであろう。これはまた、山上の施設の整備状況とも関連することと思われるが、以後わざわざこの点の指摘をすることは無くなる。

また初年のみに見られる「思い入れがある」は、「住民の想い出が詰まった」「小さいころから思い入れがある場所」という記述である。日和山はそもそも、地区の人々の先祖が自ら作った山であるという点からも、また地区内唯一の山ということからも、現実的にもシンボリックにも地域の人々にとって思いのある場所なのであろう。この意味づけは、そうしたことを強調することで、震災によって受けた壊滅的被害の大きさを引き出そうとするレトリックと考えられる。また最後の「事実」は「標高」「眺望」以外の事実を指摘したもので、追悼セレモニーのサブ会場、「海の神」を祀る場といった事実を指摘するほかは、壊滅的な被害を受けたシンボルとして日和山を位置づけている。

## 5. おわりに

本稿においては、東日本大震災で地域が壊滅する甚大な被害を受けた宮城県名取市閑上地区において、以前からあった日和山が、＜生者と死者の繋がり＞を可能とする“祈りの場”として誕生し、地域内外の人々の間に広まってきた過程を、文字資料、写真などを手掛かりに辿ってきた。これまで見てきたところをまとめると、以下のようになる。

- ①日和山は、大正9年に先祖達が自ら土を運んで作った日和見のための山で、築山当時より富主姫神社が遷座していたが、その土地は特定の個人や団体のものではなく、閑上地区で管轄してきた地区民にとって親しみのある場所であった。

- ②東日本大震災に伴う津波に呑みこまれ、日和山はすっかり変貌したが、この山は遠方からも一目でわかる地区のシンボルとなり、また山上から閑上地区が一望にできることから人々が参集する場所となった。
- ③当初は瓦礫の残る山頂から地域を望むために来ていた人が、併せて亡き人を偲んで山頂から手を合わす姿が見られ、“祈りの場”の萌芽が見られるようになる。
- ④4月初めには独創的なモニュメント（「慰霊碑」）が作られ、また山上に塔婆や木札を立てて亡き人を偲ぶ人も出てきたことで、日和山は“祈りの場”の性格を帯びてきた。
- ⑤以後山頂では富主姫神社の整備が行われ、また法華宗や立正佼成会が塔婆を建立するなど、神道・仏教・新宗教の影響下の施設が作られる中、参集した人々はそれらを“祈りの場”として取捨選択して関わっている。
- ⑥日和山山上は原則自由に使われているが、上記④の独創的なモニュメントはその場にそぐわないものとして廃棄され、緩やかな括りの中で“祈りの場”が制御されている。

末尾であるが、本稿では日和山に対して“祈りの場”として関わりを行っている人々の肉声はあまり反映されていない。こうした声の収集と、その扱いは今後の課題となる。

## 注

- 
- (1) 東日本大震災に関わる慰霊碑などの施設の関しては、拙稿「東日本大震災による被災死者の慰霊施設：南相馬市から仙台市」村上興匡・西村明編『慰霊の系譜 死者を記憶する共同体』森話社、2013年参照。
  - (2) 「閑上」の呼称、使用する文字等に関する議論は、名取市閑上郷土史研究会『閑上風土記』1977年、1～11頁に詳しい。その中では「閑上」の文字使用について諸説あることが紹介されており、『閑上風土記』作成の際に参考とした大友雄五郎が大正7年に編纂した稿本『東多賀村郷土誌』には、典拠不明ながら承応年間（1652～4年）がその最初のこととある。それによると後に湊神社と改称された水門明神に火伏の方法を伺うと、神名にある「水門（み

- 
- など)」を地名にすればよいとの神託がおりたので、それまで使っていた「陶上」を「閑上」と改めたという。
- (3) 「ゆりあげ」の語源に関しては、『閑上風土記』では五種の説を紹介している。
  - (4) 以下、本稿において使用した、東日本大震災時の被害などに関わる名取市のさまざまなデータは、名取市総務部震災記録室編『東日本大震災 名取市の記録』名取市、2014年を参考にした。
  - (5) 『閑上風土記』330頁には、昭和4年撮影の「築堤より救難所を望む」という岸辺に建つ救難所の写真が掲載されている。
  - (6) 『閑上風土記』324頁。
  - (7) 『閑上風土記』によれば、閑上では「仙台花壇流し」と呼ばれる寛永14年の大洪水以来大洪水は無かったが、明治になって二回、明治22年旧8月と明治27年旧11月に大洪水が起り、家の流出などの被害があったという。
  - (8) この写真は、ゆりあげざっこ写真会編集委員会編『むかしの写真集 閑上』（改訂版）、株式会社街ナビプレス社、2011年に、大きなサイズで収録されている。
  - (9) この「忠魂碑」は現在、昭和10年10月19日に閑上機関士会が建立した「英霊碑」、昭和8年11月3日建立の「震嘯記念」の石碑などと共に、日和山の西斜面下に集めておかれている。
  - (10) 震災直後の津波の影響で閑上地区の道路網は機能麻痺し、警察は救助や捜索のために県内外の警察官と市内建設業者の協力で交通規制を行っていた。バス通りが開通したのは15日のことであったが、盗難やガソリンの抜き取りが横行し出したことから、立ち入り制限がなされていた。閑上地区からの避難住民が、自分たちの住んでいた地区に入ることを許されたのは、震災から10日経った3月21日のことであった。とは言え、約130人が3台のバスに分乗しての訪問を伝える『朝日新聞』の見出しは、「何もない どうすれば」となっていた。